

# 献血と向社会性の関係について

1160398 尾崎隼翔

高知工科大学マネジメント学部

## 1. 概要

あるきっかけから利他行動に興味を持った筆者は、究極の利他行動と言われる献血を研究の題材に選んだ。実際に献血をしたことでさらに献血への興味が増した筆者は、「人が献血をする理由」はトロント大学の研究から明らかになった「善行の貯金仮説」と何か関係があるのではないかと考えた。さらに、献血に対する外的報酬が献血率向上につながるのか、そしてそれは向社会性や性別によって異なるのかということアンケート調査で明らかにした。その結果、求める外的報酬は性別によって異なるということが分かった。また、献血において「善行の貯金仮説」は向社会性が強い人(Prosocial)ほど成り立つという結果が出た。

## 2. 背景

筆者がもともと利他行動に興味をもった理由は友人が参加していたボランティア活動からである。休日に、特にどういった見返りもない奉仕活動をする友人に対して、今まで一度もボランティア活動を自らの意志でしたことのない筆者は疑問に思っていた。そこで、友人がなぜボランティア活動をするのかを知るため(利他行動をとる人の心理を知るため)に自らボランティア活動に2014年の7月～8月の約1か月間参加した。

内容は、2011年3月の福島第一原子力発電所の事故以来、飛散した放射能の健康への影響に不安のある親子を高知県香美市に招き、野山や川、海でのびのびと外遊びをし、リフレッシュしてもらう保養のための宿泊プログラムである。筆者のその時体験した主な活動は、ボランティア活動に必要な経費を集めるための募金箱作りや子どもたちを海や川に連れて行って一緒に遊ぶこと、そしてその他の雑用である。実際に活動に参加すると、想像していた以上の達成感のようなものがあり、どんどん奉仕の意義に関心が向くようになった。ボランティア活動を終えてから利他行動への関心が高まった筆者は、様々な利他行動を調べることにした。その中で特に関心を持った利他行動が献血である。

献血は究極の利他行動と言う人も存在するほど利他行動の

中の利他行動だ。ボランティアや電車などで席を譲るという利他行動は筆者も実際に体験したとおり達成感や相手からの感謝の言葉を得られるが、献血はほとんどそのようなものはない。募金活動も同じように達成感や相手からの感謝はないが、1円からでもできる募金活動と血液を提供する献血ではその手軽さが大きく違うと判断した。気になって実際に筆者も献血に参加したが、お茶と歯磨き粉がもらえただけで、また参加したいと思えるような気持にはなれなかった。

献血はほぼ純粋なボランティアに支えられており、献血率の低さが、常に社会問題となっている。そこで、近年、献血率を上げるために、外的な報酬の導入が検討されている。外的な報酬が生じうる問題としては、ウォーム・グロウ(warm-glow)などの内的な動機を損なわせることで、かえって献血への自発的参加を妨げるのではないかということである。しかしながら、先行研究におけるアンケート調査では、適切な種類の外的な報酬は、献血への誘因として適切に機能する可能性が示唆されており、献血率向上のための現実的な手段として検討に値する。一方で、どのような外的報酬を好ましいと考えるかは、人によって異なるため、外的報酬の種類によっては一部の献血者を排除する可能性も示唆される。したがって、献血率を向上させるためには、人々の外的報酬に対する好みの決定要因を理解することが重要である。

また、過去の道徳的な行為を思い出させられた直後の人は募金や献血、ボランティア活動などに参加する割合が低いことも明らかになっている。これらのことから筆者は、「善行の貯金」が献血をすることと深い関係があるのではないかと考えた。もし善行の貯金仮説が一般に適用できるなら、献血をした人は、利己的になる可能性がある。仮に献血において「善行の貯金」現象が見られるならば、人は、献血を善行とみなしていると考えられるため、献血の参加動機のより深い理解につなげることができる。

## 3. 目的

本研究では、アンケート調査を通して、向社会性や性別が外的報酬に対する好みに与える影響を分析する。また、同じ

くアンケート調査により、献血において善行の貯金現象が起  
こりうるかどうか検討する。献血は究極の利他行動であり、  
利他行動は生存に不利である。ではなぜ人は利他行動をとる  
のか、献血に参加する人の心理を解明して明らかにする。

#### 4. 定義

##### 4.1 利他行動の定義

“「利他」の意味は、広辞苑によると、①自分を犠牲にして他人に利  
益を与えること、他人の幸福を願うこと、②（阿弥陀仏が）人々に功  
徳・利益を施して済度すること、となっており、もともとは大乘仏教  
の語である「利他」と相まって、神仏による救済という意味も含まれ  
たようである”（川上祐美：「見返りを期待しない利他行動における共  
感の意義－奉仕活動の動機から考える－」）

これらを踏まえて本研究では、自分の不利益をかえりみず  
他人に利益をもたらす行動を利他行動と定義づける。

##### 4.2 向社会性の定義

以下の項目①～④に該当するものを本研究では、向社会性  
と定義する。

“①他者の利益になり、他者への援助行動であること②その援助行動は、  
相手からのお礼、金銭や物質的な報酬など外的報酬を期待しないもので  
あること③この種行動には何らかし損失、時間・労力のロス、疲れ、金銭の  
損失から生命の危険に至るなどさまざまな場合が含まれること④あくまで  
も当事者の自発的な行動であること”（岩川淳：「向社会的行動の発達と  
家族関係(1)－青年期の家事労働・手伝いとの関連－」）

#### 5. 研究方法

本研究は、全 50 人に 2 種類のアンケート調査を行う。まず  
行ってもらえるものは、Choice Decomposed Game である。これ  
は、SVQ を用いて向社会性を評価するものである。3 つの選択  
肢の中から一つを選ぶという課題を 9 回繰り返してもらい、3  
つの選択肢はそれぞれ Prosocial（向社会的）、  
Individualistic（利己主義的）、Competitive（競争主義的）  
に対応しており、9 回の中で 6 回の選択が一貫していた場合  
にそれぞれの orientation を決定する。ただし、5 回以下は  
分類不能とする。以下に例を示す（図 5-1）。

あなたが最も好ましいと思う選択肢を○で囲んで下さい			
	A	B	C
あなたが得るポイント	500	500	550
相手が得るポイント	100	500	300

図 5-1 Choice Decomposed Game

この実験では、ランダムに選ばれた誰かとペアになってい  
ると想像してもらい、その相手とは、以前に会ったことも、  
これから会うこともない。被験者とその相手にはそれぞれ、  
A・B・C の三つの選択肢のうちの一つを選んでもらう。そこ  
で被験者が行う選択の結果、被験者自身と相手のそれぞれが  
得るポイントが決まる。同じように、相手の選択によって、  
相手自身と被験者の得るポイントが決まる。ポイントには価  
値があり、ポイントが多ければ多いほど良い。それは相手  
にとっても同様である。この例（図 1-1）では、もし被験者  
が A を選んだら、被験者は 500 ポイントを受け取り、相手は  
100 ポイントを受け取る。B を選んだら、被験者は 500 ポイン  
トを受け取り、相手は 500 ポイントを受け取る。C を選んだ  
ら、被験者は 550 ポイントを受け取り、相手は 300 ポイント  
を受け取る。このように、被験者の選択によって被験者自身  
が受け取るポイントと相手が受け取るポイントが決まる。こ  
の例（図 1-1）の場合、A を選んだ場合が Competitive、B  
を選んだ場合が Prosocial、C を選んだ場合が  
Individualistic に該当する。この実験から、向社会性と献  
血の関連性を知ることができる。

次に行ってもらえるのは献血や利他行動に関するアンケート  
である。全部で 15 個程度の簡単なアンケートで、そのほと  
んどがアンケートに協力してもらいやすいように選択回答型  
である。献血をしたことがあるか献血をしたことがないかを  
最初に質問するが、それだけでは利他行動を調査する上で不  
十分と感じたため、その他の質問も用意した。質問は利他行  
動の代表（ボランティア・募金・公共の乗り物で席を譲る・  
エコ商品の購入）と筆者が思うものを、経験したことがある  
かである。献血経験のある人はその他の利他行動も献血経験  
がない人に比べてより多く経験していると思われる。選択回  
答以外のものは、献血をしたことがある人には献血をした理

フィッシャーの正確確率検定におけるP値																
	属性		経験					報酬					用事			
	性別	向社会的性	献血	ボランティア	募金	座席	エコ商品	物品	現金	商品券	税金	賞状	単位	献血前	献血後	
属性	性別	0.237	0.073	0.757	0.494	0.771	0.172	1.000	1.000	1.000	1.000	0.038	0.052	1.000	0.559	
	向社会的性		0.913	0.828	0.305	0.850	0.130	0.231	0.828	0.770	0.907	1.000	0.338	0.270	0.037	
経験	献血			1.000	0.728	0.136	0.080	0.163	1.000	0.351	1.000	0.351	0.514	0.372	0.546	
	ボランティア				0.002	0.373	1.000	0.650	0.533	0.532	0.508	0.532	0.746	0.547	0.373	
	募金					0.733	0.416	0.301	0.297	0.494	1.000	0.287	1.000	0.314	0.733	
	座席						0.006	0.054	0.767	0.241	0.215	0.771	0.758	0.027	0.407	
	エコ商品							0.064	1.000	0.494	1.000	0.494	0.468	0.738	0.515	
報酬	物品								1.000	0.004	0.309	0.642	1.000	0.020	0.651	
	現金									0.026	0.014	0.117	0.049	0.372	0.225	
	商品券										0.018	1.000	0.199	0.077	0.382	
	税金											0.504	0.001	0.751	0.537	
	賞状												1.000	1.000	0.382	
	単位													0.760	0.548	
用事	献血前														0.000	
	献血後															

図6-1 フィッシャーの正確確率検定

由、逆に献血をしたことがない人にはしない理由を教えてもらおう。また、献血をした人に外的報酬を与えたとしたら何が良いと思うかを質問する。外的報酬の種類は全部で6種類(物品・現金・商品券・住民税減税・社会的評価・単位)あり、賛成するか賛成しないかの2択で答えてもらう。この質問から、献血をしたことがあると答えた人とない人、Prosocial、Individualistic、Competitiveのそれぞれでどのような答えの違いが出るのかを調べることができる。また、献血という行動自体を「善いこと」をしたという意識で行っているのか、もしくは「当たり前のこと」をしたという意識で行っているのかを調べることで、「善行の貯金」が献血時にもされているのかが分かる。さらにその後、何もメリットがない面倒な用事を他人から頼まれた場合に断るか断らないかを2択で、普段ならどうするかと献血後ならどうするかかの2パターンを想定して答えてもらう。さらに Choice Decomposed Game と同様にその相手とは以前に会ったことも、これから会うこともないという条件をつけることで、本当に利他行動を行うかどうか分かる。さらに、年齢や性別の違いが出る可能性があるため、1番最後にこの2個を答えてもらっている。このアンケート調査を行った人と Choice Decomposed Game を行った人が共通人物か分かるように2種類のアンケートはセットで配布する。

## 6. 結果

2種類のアンケートを高知工科大学の学生50人(男子32人、女子18人)からとった結果、Prosocialの人が27人(男子14人、女子13人)、Individualisticの人が17人(男子13人、女子4人)、Competitiveの人が6人(男子5人、女子1人)であった(図6-2、図6-3)。さらに献血をした

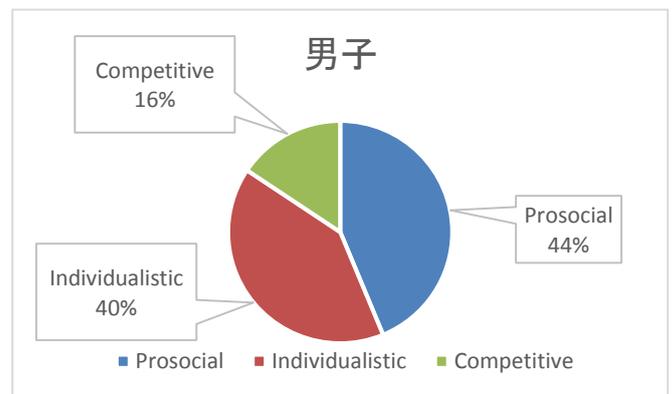


図6-2 男子の向社会的性

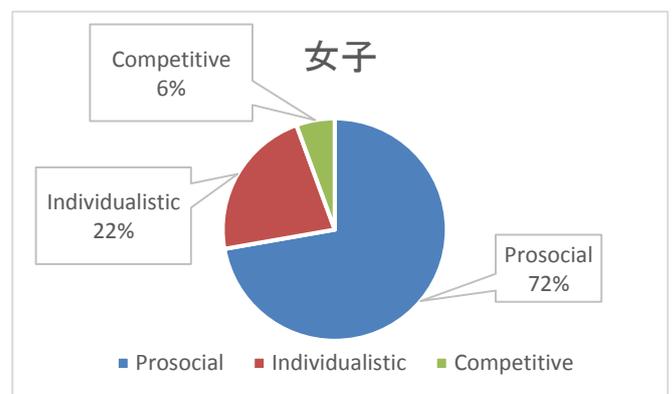


図6-3 女子の向社会的性

ことがあると答えた学生は50人中16人(男子13人、女子3人)だった。それら2種類のアンケート結果をフィッシャーの正確確率検定を用いて分析した結果、「善行の貯金仮説」とは少し異なるが、興味深い結果が出た(図6-1)。図6-1は、二要因間も関係の有意性をP値で表したものである。P値が0に近づけば近づくほど、二要因には確かな関係性がある(=有意性が高い)と言える。図6-1ではその有意性が最も高いもの(P値が0.01以下)を赤色で塗りつぶし、その

次に有意性が高いもの（P 値が 0.05 以下）を黄色で塗りつぶし、さらに若干の有意性が見られたもの（P 値が 0.1 以下）を肌色で塗りつぶしてある。

まず、筆者が考えていた向社会性と献血の関係だが、Prosocial、Individualistic、Competitive それぞれと献血経験の割合はほとんど同じであり、向社会性と献血にはこれといった関係性は見られず、何も結果が出なかった（図 6-4）。さらに献血経験がある人ほどその他の利他行動を多く

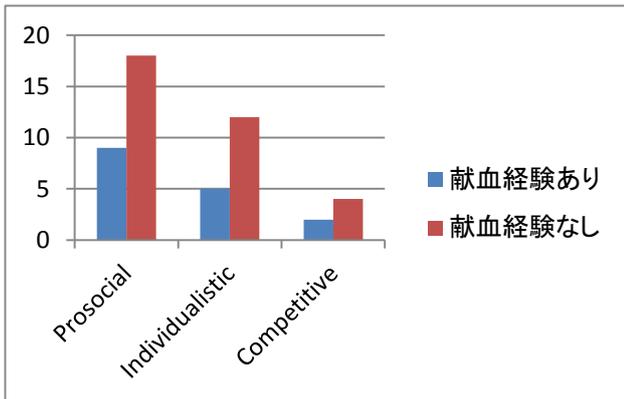


図 6-4 向社会性と献血の関係

経験しているかとも思ったが、そのような結果は何も出なかった。では、本研究で最も大切なことである「善行の貯金仮説」についてだが、思っていたような結果は出なかった。普段なら赤の他人から面倒な用事を頼まれても断らないが、献血後は赤の他人から面倒な用事を頼まれたら断ると回答すると予想していたが、予想通りの回答をした人は数名しかいなかった。しかし、予想外の結果が出た。図 6-1 から向社会性と献血後の用事の関係を見ると、P 値が 0.037 となっていて黄色で塗りつぶされていることが分かる。これらの関係を深く調べると、Prosocial な人ほど献血後に赤の他人から用事を頼まれたときに断ると答えた人が多かったのである。普段なら赤の他人から面倒な用事を頼まれても断らないが、献血後は赤の他人から面倒な用事を頼まれたら断ると回答するという筆者の予想通りの回答をした人が数名いたと前述したが、その回答者のほとんどが Prosocial であった。さらに、Prosocial の人は普段の場合も用事を断ると回答した人が多かった。Individualistic の人たちは普段の場合も献血後も用事を断らないと回答した人が多く、ほとんどの人が普段の場合と献血後の場合での回答に違いがなかった。Competitive の人は普段の場合であろうと献血後であろうとほぼ全員が用事を断ると回答していた。以上の結果から考えられることは、

Prosocial の人は利他行動を「良いことをしよう、良いことをしている」と認識して行っているのではないかということである。しかし、Individualistic の人は利他行動をする場合も「自分がしたいからする」と思っている可能性がある。事実、Individualistic の人の中で献血経験がある人の献血をする理由には、カップラーメンがもらえるからといった個人的な理由が多かった。つまり、Prosocial の人は、利他行動を「良いこと」と認識して行うぶん献血後は「善行の貯金」がされているという可能性があることが分かった。それに対して Individualistic の人は「自分がしたいからする」という気持ちで利他行動を行うため、献血後でも「善行の貯金」はされないという結果が出た。また、Competitive の人は純粋に誰かを助けようと思う人が極端に少ないと考えられる。

その他で図 6-1 から分かることは、ボランティアをする人と募金をする人の関係や、献血の報酬として住民税減税と単位の関係が強いことが分かったが、そこから新たに分かったことは特になかった。それ以外にも図 6-1 の赤色で塗りつぶした箇所からは特にこれといった関係性は分からなかった。しかし黄色で塗りつぶした箇所と肌色で塗りつぶした箇所からは少し興味深い結果が出た。献血後に与える報酬として、女子は賞状（社会的報酬）を賛成すると回答した方が多く、男子は女子と比べて賞状（社会的報酬）に賛成すると回答した人は少なかった（図 6-5、図 6-6）。また、男子は単位を報酬として与えられることを賛成すると回答した人が多かったことに対して女子は全 18 人の内 1 人だけしか賛成すると回答した人はいなかった。以上の結果から分かることは、性別によって献血の報酬へ求めているものが違うということである。女子は社会的報酬という他人から認められるこ

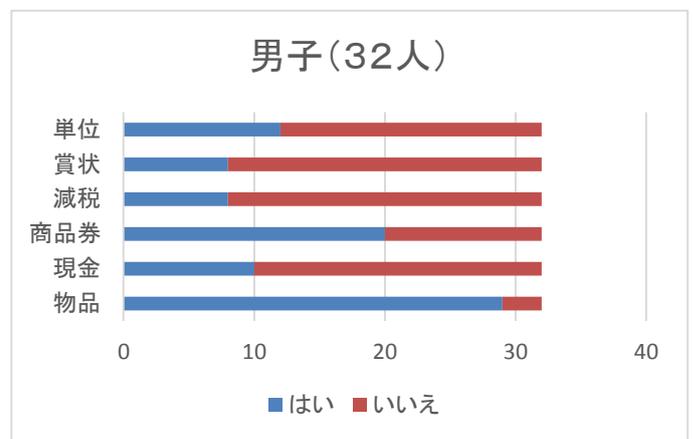


図 6-5 男子の求める外的報酬

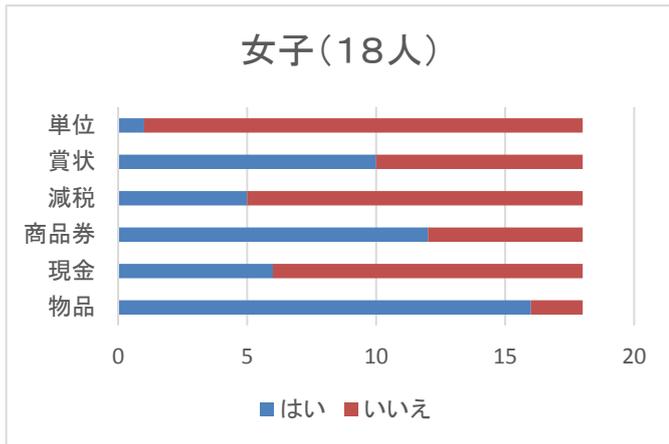


図6-6 女子の求める外的報酬

とを求めているのに対して、男子は社会的な報酬よりも実際に役に立つものを求める傾向にあることが明らかになった。近年、献血をする若者が減ってきているが、外的報酬の種類を今までのものから変更し、性別によって報酬を変えることで献血率を上げることに繋がる可能性がある。そして、性別を問わず今回のアンケート調査では、報酬として現金に賛成すると回答した人は少なかった。外的報酬事態には賛成する人は多くても、現金を報酬とした場合は、逆に献血参加率が下がるかもしれない。これは、同じ1000円という値段だとしても、商品券を与えられた場合は報酬として受け取る気持ちになれるが、現金を与えられた場合は自分の献血行為に値段をつけられた気持ちになり、ウォーム・グロウなどの内的な動機が損なわれるからである。外的報酬を与えることは、献血率向上につながるかもしれないが、外的報酬を与える場合は何を与えればよいかをよく考えなければいけない。

引用文献

Gigazine

[http://gigazine.net/news/20091210\\_green\\_moral\\_credential/](http://gigazine.net/news/20091210_green_moral_credential/)

川上祐美:「見返りを期待しない利他行動における共感の意義—奉仕活動の動機から考える—」

<https://dspace.wul.waseda.ac.jp/dspace/bitstream/2065/28541/3/Honbun-4369.pdf>

岩川淳:「向社会的行動の発達と家族関係、(1) —青年期の家事労働・手伝いと関連—」

[http://repo.kyoto-wu.ac.jp/dspace/bitstream/11173/868/1/0080\\_001\\_005.pdf](http://repo.kyoto-wu.ac.jp/dspace/bitstream/11173/868/1/0080_001_005.pdf)

